

## 【実践報告】

# 大学における英語多読実践報告

種村 綾子  
岐阜大学非常勤講師

### 要旨

本論文では、2014年度～2015年度に全学共通教育の英語の授業で行った多読実践を報告する。多読用教材には、英語母語話者の児童・小学生用の絵本・学習絵本である Leveled Readers と英語非母語話者学習者用の Graded Readers を使用した。実践の結果学生は、授業内で20～30分と授業外で毎週1～5冊の図書を借りて読み、半期の授業において約10万語を読破した。また、1週間あたりの授業外読書時間の平均は約70分間であり、授業外での英語の読書習慣が身についたことが示唆された。実践後に行った質問紙調査からは、学生のほとんどが、多読を楽しむことができたこと、面白いと思う多読図書に出会えたこと、多読によって英語力の向上が実感できたこと、多読が自分のためになったと感じられたことなどが示された。

キーワード：多読，リーディング，大学英語教育，授業実践

### 1. はじめに：実践の背景と目的

Krashen(1985)がインプット仮説で示したように、第二言語習得においては、理解可能な多量なインプットが必要不可欠である。しかし、日本で外国語を習得しようとする場合、学習対象言語の多量のインプットの機会を得ることは容易ではない。日本の英語学習者のインプット量について、門田・野呂・氏木(2010)は、中学と高校の英語検定教科書の語数に関する長谷川・中條・西垣(2008)の調査結果を示しながら、教科書を通してのインプット量の少なさを指摘している。中高の平均的な検定教科書の総単語数は、約3万語であり(高瀬, 2010)、一般的な日本人英語学習者は、大学入試対策として教科書以外の英文を読んでいたとしても、中学から大学入学前までに読む英語は10万語に満たないことが指摘されている(酒井・太田・柴田, 2004)。映画『ダヴィンチコード』の原書 The Da Vinci Code の総語数が138,216語(古川・神田, 2010)であることから、日本人英語学習者

の大学入学までのリーディングによるインプットの総量は、洋書1冊分にも満たないことになる。

筆者は、自身の担当する全学共通教育の英語の授業において、日本人大学生に不足している英語の多量のインプットを行うことのできる活動を取り入れる必要性を感じ、多読活動の導入を検討した。多読について山下(2004)は、多読は、外国語学習者のインプット量の少なさを無理なく増やせることのできる有効な方法であると述べている。門田・野呂(2004, p.339)では、「Krashen(1985)のインプット仮説が発表されて以来、多読は従来よりはよく実践され、その成果も発表されるようになってきた」と述べられており、高瀬(2010)は2003年から2008年の間に、実際に、英語多読を授業に取り入れている日本国内の学校数が急速に増加したことを示している。

多読は、「英語の多読とは、文字通り多量の英語を読むことであり、読みの指導形態の1つ」(山下, 2004, p.23)であり、高瀬(2010, p.24)は、多読授業を精読による従来のリーディング授業と比較し次のようにまとめている(表1)。

表1 従来のリーディング授業と多読授業の違い

	従来のリーディング	多読授業
受講態度	受動的・消極的	能動的・積極的
テキスト選択	教師	学習者
教材・レベル	統一(教師が選択, 全員同じ教材)	多様(学習者が各自の英語力・好みに応じて選択)
読書量	少量(中高6年間の標準的テキストで約3万語)	大量(年間読書目標10万~30万語以上, 3年連続で50~100万語以上)
英語の内容	断片的・部分的(1回の授業につき1~2パラグラフ)	全体把握・状況に即した内容(本1冊単位)
英語の難易度	高い(実際の英語力よりかなり高い)	低い(辞書を使用せずに楽に読める程度)
読むスピード	遅い	速い(wpm=100以上)
辞書	フルに活用	読書中は使わない
日本語訳	主に全訳	しない
内容理解	訳した日本語	英語のまま
教師の役割	教える, 説明・解説する, 問題を解かせる	観察・図書選択指導, 一緒に読む

表が示すように、多読は、読む図書を多種多様な図書の中から学習者自身が英語力や好みに応じて選択するなど、能動的に行われる学習方法である。学習者の能動性・主体性・自主性が重んじられており、昨今その実践や成果が多数報告されているアクティブ・ラーニングの要素も含んでいると言える。筆者が授業を担当している学生は、大半がすでに基本的な英語力を身につけており、主体的に学習に取り組むことができるため、多読は、実践対象とな

る学生に非常に適した英語学習方法だと思われる。

また、鈴木(1996)は、「生徒に英文を読む楽しさを経験させ、卒業後も英語と付き合いを続けていくことができる reading 指導をめざして」高校において多読実践を行っている。大学生にとっても、多読は、英語の読書の楽しさを経験し、社会に出ても自立した読み手として英語の読書を続けられる素地を養うのに大変有効な指導方法であると思われる。

不足している英語のインプット量を無理なく増やすことができ、学習者が能動的に取り組むことができ、学習者を授業終了後も英語の読書を続けられる自立した読者に育てることのできる多読活動は、大学の全学共通教育で行う英語授業の実践として意義ある活動であると考えられる。そこで、多読活動を筆者が担当する全学共通教育の英語授業に導入することにした。

次に、読書語数の目標について検討した。多読に初めて取り組む学習者は、どれくらいのインプット量を目指すべきであろうか。深田(2009)は、豊田高専における多読実践で 100 万語以上を読破した学習者への自由記述式質問紙調査の回答を基に、100 万語多読を達成するほどの長期的・自律的多読を可能にした要因を考察し、10 万語程度を超えると教師が手をかけなくても自律した読者に育つ可能性が高いとして、10 万語まで教師が積極的に支援する必要があると述べている。高瀬(2010, p.27-28)は、彼女が指導した高校生は 5~6 万語読むところで英文を読むのに慣れ、快適に読めるようになり、10 万語ぐらい読むと成績が伸び始めると述べている。深田(2009)や高瀬(2010)の示唆を踏まえると、10 万語が多読の導入段階の目標として考えられる。そこで、本実践では、10 万語の読破を目標にして多読活動を行うこととした。

## 2. 実践の内容

### 2. 1 実践期間と対象クラスの概要

本実践は、2014~2015 年度の筆者が担当する全学共通教育の英語の授業、合計 8 クラス(218 名)で行った。実施クラスはすべて英語を専攻としない学生のクラスで詳細は以下の通りである。実践期間は、各学期 10 週間で、週 1 回 90 分の授業のうち 20~30 分の多読を 10 回実施した。また、宿題として、1 週間当たり多読図書を 1 冊以上(5 冊まで)借りて読むように指導した。多読経験については、高校時代にクラス全員で同じ多読図書を購入するなどして多読図書を何冊か読んだことがある学生が数名いたが、本実践のような継続的な多読活動については全員未経験であった。

- ・ 2014 年度前期 48 名 : 2 年生 2 クラス (A:26 名(男 16/女 10), B:22 名(男 10/女 12))
- ・ 2014 年度後期 95 名 : 1 年生 3 クラス (A: 35 名(男 33/女 2), B: 33 名(男 30/女 3), C: 27 名(男 9/女 18))
- ・ 2015 年度前期 46 名 : 2 年生 2 クラス (A:24 名(男 11/女 13), B:22 名(男 8/女 14))
- ・ 2015 年度後期 29 名 : 1 年生 1 クラス(29 名(男 9/女 20))

## 2. 2 使用教材（多読図書）

本実践用に、約 700(2 クラス)~1000 冊(3 クラス)の多読図書を用意した。多読図書は、英語を母語とする児童・小学生を対象とした英語習得用段階別絵本・学習絵本である Leveled Readers（全体の約 1 割）と英語が母語でない英語学習者のために語彙・文法・構文を制限し、平易な英文で書かれた Graded Readers(全体の 9 割)を使用した。学生が図書を選びやすいように、それぞれの本には、図書のレベルが一目でわかるように背表紙にレベル別に色のラベルが貼ってあり、表紙には、読み易さレベル(YL)・ジャンル・総語数を記したラベルが貼られているものを使用した。ラベルの色は、YL0.0~0.9→茶、YL1.0~1.9→赤、YL2.0~2.9→黄、YL3.0~3.9→緑、YL4.0~4.9→青、YL5.0~5.9→紫とし、授業では主に茶色、赤、黄色、緑の図書を使用した。使用した多読図書のシリーズ(出版社名)は以下の通りであった。

Leveled Readers : Curious George, Oxford Classic Tales

Graded Readers : Cambridge English Readers, Foundations Reading Library,  
Macmillan Readers, Oxford Bookworms Library, Penguin Readers,  
Scholastic ELT Readers

## 2. 3 授業設計

半期 15 回の授業のうち、3 回目から 13 回目の授業で 20~30 分の多読を 10 回行った。10 万語以上読破することを目標とし、宿題として授業外で多読図書を 1 冊以上（最大 5 冊まで）借りて読む課題を 10 回出した。多読を行う時間の他に、準備や貸し出し等に約 15 分が必要であるため、1 回あたり合計約 35~45 分を費やした。その他の時間は、それぞれ英語コミュニケーション活動等、多読以外の活動を行った。多読を行う前に、「多読オリエンテーション」を行った。15 回目の授業で、多読によるリーディング力の向上を測るためリーディングテストを行った。また、2015 年度は、6 回目の多読が終わった次の週に、これまで読んだ中で一番面白かった、クラスメイトにお勧めしたい本を英語で紹介する「お気に入りの図書発表会」を行なった。

## 2. 4 多読オリエンテーション

多読の意義を理解させ、多読の効果を最大限に実感させるため、多読を行う前に、上述の通りパワーポイントを用いて多読についてのオリエンテーションを約 30 分間行った。オリエンテーションでは、なぜ多読をするのか、多読の効果、多読の方法、多読を続けるための読み方、多読図書の種類と特徴について、多読図書に貼られているラベルの見方、多読図書の選び方、目標語数、多読手帳の記録の仕方、多読のルールと注意事項について説明を行い、最後に多読図書の紹介のため、多読図書を 1 冊、途中まで読み聞かせた。

なぜ多読をするのかについては、前述した日本人英語学習者の英語のインプット量の不

足について説明し、インプット量を増やすことの必要性を認識させた。また、10万語を目標とする理由についても説明した。

学生の多くは、これまで経験したことのない多読に興味津々といった様子で真剣にオリエンテーションを聞いていた。最後に教師が多読図書を読み聞かせた場面では、学生たちは笑顔を見せ、物語の展開に笑い声も沸き上がった。

## 2. 5 多読活動の手順と学生の様子

授業は次のような手順で行った。

- ① 学生は、来た順に、先週借りた多読図書を返却する。この際、ペアの学生に返却の確認を受け、多読図書貸出票にサインをしてもらう。
- ② 授業内で最初に読む多読図書を1冊選ぶ。多読の所要時間を計るため、時計もしくはストップウォッチを準備する。(①と②で約5分) ※原則としてここまでを授業が始まる前に行う。
- ③ 授業内多読。所要時間を計りながら読む。(20～30分) 選んだ本を読み終えた場合や、違う本を読みたくなった場合は、本を返却し、新しい本を借りる。
- ④ 授業外(宿題)用の本の貸し出し。本日借りる本(1～5冊)を選ぶ。(約10分)
- ⑤ 貸出票に図書情報を記入し、ペアの学生に確認、サインをもらう。(約5分)

学生は、多読に集中し、私語をする者はおらず、真剣に黙々と読書を行っていた。授業内多読時間が終了し貸し出しをする場面では、様々な本を手に取り、「これは良かった!」、「これ読んだ?～だよね。」などと、図書に関して意見交換をしながら、楽しそうに笑顔で本を選んでいった。筆者はこの時間を利用して、学生に直接、おすすめの本を紹介したり、多読手帳をチェックし、正しく記入されているか、多読が順調に進んでいるか等の確認を行った。



図1 多読授業の様子

## 2. 6 多読図書の取り扱いについて

多読図書は、ラベルが見えるように背表紙を上にして、5つのプラスチックのボックスに並べた。図書は毎回台車に乗せ、保管場所から教室へ運び、学生が取りやすいように教室の後ろの空いている席に並べて置いた。授業終了後、当番の学生に図書の整頓と保管場

所への運搬をお願いした。学生は1学期に1回、2～3人で図書当番を担当する。実際に多読図書に触れて、どんな図書があるのかを知ってもらう目的と、図書を返却する際に整理整頓を心がけてもらうために図書当番を設けた。



図2 多読図書

## 2.7 多読手帳について

学生には、多読クラス用読書記録手帳（SEG）を購入してもらい、授業内外で読んだ本について、冊数番号、日付、タイトル、シリーズ(出版社名)、読み易さレベル、読語数、累計読語数、読書時間、累計読書時間、評価(記号)、感想の11項目を記入するよう指導した。

冊数	書名	著者	レベル	読語数	読書時間	累計読語数	累計読書時間	評価	感想
1	King Arthur	OS	0.7						
2	Escape	OS	0.7						
3	Secret Phone	OS	0.7						
4	Simon	OS	0.7						
5	Mad House	OS	0.7						
6	Dr. T. S. P.	FR	0.7						
7	Lost at Sea	FR	0.7						
8	Elly and the Ghost	FR	0.7						
9	The Shogun's	FR	0.7						
10	STONEY BRIDGES	FR	0.7						

図3 学生が記入した多読手帳

手帳は、5回目終了後及び10回目終了後の2度回収した。1回目の提出の際には、現在のクラスの読書状況（平均語数、時間等）を伝え、極端に語数の少ない学生に声をかけ、状況を確認し、読語数を増やすためのアドバイスをした。2回目（多読終了後）には、クラスの平均読書語数と平均読書時間数を発表し、目標である10万語を達成できた人数を伝えた。また、読破語数の多い学生（上位5名ほど）を発表した。多読の成果は、読語数を点数化し、授業評価に加えた。多読の評価は、この点数と学期末に行ったリーディングのテスト（2.9参照）で評価した。

## 2.8 「お気に入りの図書発表会について」

クラスメイトのおすすめの本を知り、より多くの面白い本に出会うことによって、多読へのモチベーションを上げるため、6回目の多読が終わった次の授業で、「お気に入りの図書発表会」を行った。「お気に入りの図書発表会」では、学生は自分のお気に入りの多読図書（1冊）を選び、その本の紹介文（推薦文）を110～160語の英語で書いた。その後、原稿をできるだけ暗記し、6人程度のグループでお気に入りの図書を英語で紹介し合った。原稿を持ち込むことは可能だが、原稿を持ち上げて読むことは認めず、完全に暗記できていない場合は、原稿をチェックした後、顔を上げ聞き手の目を見て話すよう指導し

た。発表後、学生にグループの中で一番良かった発表を投票させ、グループの代表を選ばせた。選ばれた学生には、クラス全員の前で発表してもらった。学生は、それぞれのクラスメイトの発表に対してコメントシートという名刺サイズの手紙に感想を書き、本人に手渡した。

少人数のグループで行ったことや、原稿を完全に暗記しなくてもよいこともあり、学生たちはリラックスした様子で、楽しそうに発表し、クラスメイトの発表を聞いていた。グループの代表に選ばれた学生も皆、堂々と発表を行った。

この発表会は、多読の動機づけを主な目的としているため、原稿の完全暗記や高いプレゼンテーションスキルは求めなかったが、実際には、原稿を完全に暗記している学生も多く、より本の良さが伝わるように、ジェスチャーや抑揚などをつけてしっかりと発表の練習をしてきている学生も少なくなかった。学生たちは、多読とは別のプログラムで学期末に個人プレゼンテーションを控えているので、感想には、代表の学生の発表について良かった点を見つけて、次回のプレゼンに活かしたいというコメントが多く寄せられた。また、本来の目的である多読へのやる気が高まったという内容のコメントも多く見られた。

「私がまだ知らない面白い本がたくさんあることが分かった」、「友達の読んでいる多読図書を知ることができて良かった」、「これからぜひ読んでみたい」などである。学生の反応と感想から、「お気に入りの図書発表会」が、学生の多読に対するモチベーションを向上させることを実感した。

## 2. 9 リーディングテストについて

多読により向上したリーディング力を測るため、多読終了後、学期末の授業でリーディングテストを行った。授業で使用していない出版社の多読図書から、授業で学生が読んでいる読み易さレベル 1.0～2.5 レベルと同等のレベルの多読図書から約 3,000～4,000 語を抜粋し、約 30～40 分間で内容理解のリーディングテストを行った。

## 3 実践の結果と考察

### 3. 1 多読累計語数・時間

2014 年度～2015 年度の学生の多読結果を、表 2, 3 にまとめた。2 年間の多読実践における学生の平均読語数は 96,737 語であった。また、54%の学生が目標の 10 万語読破を達成した。最高で 20 万語以上を読破した学生もいた。10 万語という目標を達成した学生たちは、大学入学までに自身が読んだ英語とほぼ同じだけ、もしくはさらに多くの英語を 10 週間の多読活動でインプットできたことになる。平均読語数こそ、10 万語に届かなかったが、多くの学生がこの実践において、英語力向上のために不可欠な多くのインプットを得ることができたと言えよう。

また、多読時間は、授業内外合わせて平均 929 分であった。授業内多読時間を差し引く

と、学生は、1週間あたり約70分程度を多読に充てたと考えられる。毎日少しずつ多読を行っていた場合は、1日約10分程度の英語読書習慣がついたと言える。

表2 2014年度多読実践結果

年度	2014年度					2014年度 平均 (N=143)
	前期		後期			
学期	2年生		1年生			
学年	2年生		1年生			
クラス	A (N=26)	B (N=22)	A (N=35)	B (N=33)	C (N=27)	
平均読語数	98,525語	89,978語	98,487語	98,798語	109,240語	99,287語
最高読語数	143,781語	180,374語	169,640語	167,423語	186,835語	186,835語
最低読語数	48,690語	41,575語	22,542語	29,993語	33,778語	22,542語
10万語読破者数	14人(54%)	9人(41%)	24人(69%)	18人(55%)	20人(74%)	85人(59%)
平均読書時間	988分	772分	937分	929分	1,066分	943分
最高読書時間	1,416分	1,356分	1,862分	1,693分	2,360分	2,360分
最低読書時間	482分	316分	326分	351分	310分	310分

表3 2015年度及び2014～2015年度多読実践結果

年度	2015年度				2014～2015年度 平均 (N=218)
	前期		後期	2015年度	
学期	2年生		1年生	平均	
学年	2年生		1年生	平均	
クラス	A (N=24)	B (N=22)	(N=29)	(N=75)	
平均読語数	88,223語	75,948語	106,984語	91,877語	96,737語
最高読語数	114,301語	113,562語	204,085語	204,085語	204,085語
最低読語数	39,678語	28,044語	45,820語	28,044語	22,542語
10万語読破者数	11人(46%)	3人(14%)	19人(66%)	33人(44%)	118人(54%)
平均読書時間	881分	709分	1,068分	903分	929分
最高読書時間	1,383分	1,299分	2,107分	2,107分	2,360分
最低読書時間	316分	365分	472分	316分	310分

### 3. 2 質問紙調査及び大学授業評価アンケートの結果より

筆者にとって、本実践が多読活動の初めての試みであったため、実践を行う前は、学生の多読に対する反応が予測できず、主に「学生は多読を楽しむことができるか」、「多読によって英語力の向上が実感できるか」、「多読図書、多読のやり方は適切か」について不安があった。本項では、この3点について、筆者の所感と毎学期末に行われる大学授業評価アンケート及び2015年度後期の多読終了後に1年生のクラスで行った質問紙調査の結果



(表 4)を合わせて考察する。

「学生は多読を楽しむことができたか」については、2年間の多読活動を振り返って、筆者は、多くの学生が多読を楽しんでいるという印象を受けた。質問紙調査においても、Q1の「多は楽しかったか」という質問に、29人中27人(93.1%)が「5:そう思う」、「4:どちらかと言えばそう思う」と回答した。Q2の「多読によって多読をはじめる前よりも英語が好きになったか」にも、21人(72.4%)の学生が、「5」、「4」と回答した。多くの学生たちが、楽しんで多読に取り組めたことが分かった。

「多読によって英語力の向上が実感できたか」については、筆者は学生との会話や大学授業評価アンケートの自由記述欄の回答から、多くの学生が、多読による英語力の伸びを感じており、多読が学生たちの英語力向上に役立っているとの実感があつた。質問紙調査でも筆者の実感を裏付ける結果が出た。Q3「多読によって英語力が全体的に伸びたと思いますか」には、19人(65.5%)の学生が「5:そう思う」、「4:どちらかと言えばそう思う」と回答した。どのような力が伸びたかとう問いには、Q4「読む力(内容を理解する力・概要を把握する力)」が26人(89.6%)、Q5「多読によって英語が楽に読めるようになった」は22人(75.8%)、Q6「読むスピード」が21人(72.4%)が「5」「4」と回答し、リーディング力の伸びを実感している学生が多いことが分かった。Q11「総合的に見て、多読は、自分にとってためになったと思うか」については、25人(86.2%)が「5」、「4」と答え、ほとんどの学生が、多読が自分に何らかのプラスの影響を与えたと感じていることが分かった。

具体的に、多読のどのような点が良かったと感じているのかを自由記述欄から見てみると、「多読で英語が抵抗なく読めるようになった」というような英文を読むことへの苦手意識が軽減されたという回答が最も多く見られた。また、「英語は苦手だったけど、自分のレベルと興味に合ったものを読むので、英文がすらすら読めて、読むのが楽しかった」など多読図書を読むことの楽しさを実感している学生も多かった。「普段英語の本を読むことがないので、多読ができてよかった」といった英語の本を読む機会を得られたことが良かったという感想も多く見られた。他には、多読を経験して自信がついたという内容の「自分でも英語の本が読めると分かって嬉しかった」、「最初は数百語の本でも読むのが大変だったが、最後には5000語程度の本を読めるようになり達成感があつた」のような回答、「多読をしてみて、ハリーポッターの原書を読んでみたくなった」というような今後とも英語の本を読もうというモチベーションが高まったという回答も見られた。

「多読図書、多読のやり方は適切であったか」については、多読図書について、Q12「多読図書のレベルは適切だったか」、Q13「多読図書の内容に興味を持てたか」、Q14「多読図書の冊数は十分だったか」という質問をしたが、すべての質問において85%以上の学生が「5:そう思う」、「4:どちらかと言えばそう思う」と回答をした。Q15「面白いと思う多読図書を見つげられたか」については、「5」、「4」と回答した学生が29人中28人(96.6%)に上り、ほとんどの学生が多読図書の面白さを経験することができたことが分かる。多読図書についての意見や要望を記述式で回答する項目では、SFなど特定のジャンルの本を増や

してほしいという意見や、もっとレベルの高い本が読みたい、2000～3000語の本を増やしてほしい、教師のおすすめの本や、皆がよく借りている人気の本をリストにして紹介してほしいなどの要望があった。

多読のやり方については、Q16「授業内多読の時間の長さは適切か」に「5」、「4」と答えた学生が、24人(82.7%)であった。また、22人(75.8%)の学生が、Q17「授業以外(自宅で、図書館で、休み中に等)も英語の多読を積極的に行った」と回答した。また、「多読のやり方」についての意見や要望、改善点には、貸し出しについて「ちょっとした移動時間や家での休み時間に英文に触れられたのは良かったと思う」といった授業外でも絶えず英語に触れられるという利点についての記述や、「5冊以上借りたい」などの要望があった。「多読はやる気のある人がのびるシステムだからよいと思う」という感想や、「～語以上読まないと単位を認定しないなどの決まりを作るともっと読む語数が増えるのではないか」という提案、「授業内でもっと長時間多読をしたかった」という要望もあった。

また、本実践を計画する前に、そもそも多読は授業外でもできることなので、宿題として授業外のみで行った方がよいのではないかと、宿題で行う方法も検討したため、質問紙調査に「多読は授業+宿題(貸し出し)で行なうほうが良いと思うか、宿題のみで行なうほうが良いかとその理由」の質問を加えたが、29人全員が「授業+宿題(貸し出し)で行なうほうが良い」と答えた。その理由は、「授業である程度読んでおくと、続きを読みたくなり、家でも読む気が起こるから」、「授業で強制的に読む時間があるから、多読の面白さに気づけたと思う」、「宿題のみだと読む気が何日も続かないと思う」、「授業で多読をしてみんなで頑張っている感じが得られるから宿題でも頑張ろうと思えた」といった、授業で多読をすることが授業外で多読をするモチベーションとなるといった意見が最も多かった。

この他に「授業の初めに読むことで、英語の授業に取り組みやすくなる」、「多読で集中力が上がり、良い状態で授業を受けられたから」という多読が、英語の授業をより効果的にするための導入の活動に適しているという意見もあった。授業外だけで行うことも可能な多読であるが、学生たちは授業内多読があることでより積極的に多読に取り組めると考えていること分かり、授業内多読の重要性が明らかになった。

表4 質問紙調査の項目及び結果 (N=29)

5: そう思う	4: どちらかと言え ばそう思う	3: どちらとも言え ない	2: どちらかと言え ばそう思わない	1: そう思わない
Q1: 多読は楽しかったですか				
12人 (41.4%)	15人 (51.7%)	1人 (3.4%)	0人 (0%)	1人 (3.4%)
Q2: 多読によって多読をはじめの前よりも英語が好きになったと思いますか				
10人 (34.5%)	11人 (37.9%)	7人 (24.1%)	1人 (3.4%)	0人 (0%)
Q3: 多読によって英語力が全体的に伸びたと思いますか				
8人 (27.6%)	11人 (37.9%)	10人 (34.5%)	0人 (0%)	0人 (0%)

Q4: 多読によって英語を読む力(内容を理解する力・概要を把握する力)がついたと思いますか				
11人 (37.9%)	15人 (51.7%)	3人 (10.3%)	0人 (0%)	0人 (0%)
Q5: 多読によって英語が楽に読めるようになったと思いますか				
11人 (37.9%)	11人 (37.9%)	7人 (24.1%)	0人 (0%)	0人 (0%)
Q6: 多読によって英語を読むスピードが速くなったと思いますか				
9人 (31.0%)	12人 (41.4%)	6人 (20.7%)	2人 (6.9%)	0人 (0%)
Q7: 多読によって語彙力が伸びたと思いますか				
0人 (0%)	7人 (24.1%)	15人 (51.7%)	6人 (20.7%)	1人 (3.4%)
Q8: 多読によって英語の文法力が伸びたと思いますか				
0人 (0%)	5人 (17.2%)	15人 (51.7%)	9人 (31.0%)	0人 (0%)
Q9: 多読によってライティング力が伸びたと思いますか				
1人 (3.4%)	6人 (20.7%)	11人 (37.9%)	10人 (34.5%)	1人 (3.4%)
Q10: 多読によってリスニング力が伸びたと思いますか				
2人 (6.9%)	10人 (34.5%)	10人 (34.5%)	6人 (20.7%)	1人 (3.4%)
Q11: 総合的に見て、多読は、自分にとってためになったと思いますか				
15人 (51.7%)	10人 (34.5%)	4人 (13.8%)	0人 (0%)	0人 (0%)
Q12: 多読図書のレベルは適切だと思いましたか				
17人 (58.6%)	9人 (31.0%)	3人 (10.3%)	0人 (0%)	0人 (0%)
Q13: 多読図書の内容に興味を持ってましたか				
13人 (44.8%)	15人 (51.7%)	0人 (0%)	0人 (0%)	1人 (3.4%)
Q14: 多読図書の冊数は十分だと思いましたか				
18人 (62.1%)	8人 (27.6%)	2人 (6.9%)	1人 (3.4%)	0人 (0%)
Q15: 面白いと思う多読図書を見つけられましたか				
20人 (69.0%)	8人 (27.6%)	0人 (0%)	1人 (3.4%)	0人 (0%)
Q16: 授業内の多読時間は、適当な長さだったと思いますか				
17人 (58.6%)	7人 (24.1%)	1人 (3.4%)	4人 (13.8%)	0人 (0%)
Q17: 授業以外(自宅で、図書館で、休み中に等)も英語の多読を積極的に行いましたか				
11人 (37.9%)	11人 (37.9%)	4人 (13.8%)	3人 (10.3%)	0人 (0%)

#### 4. 今後の課題

多読の結果及び質問紙調査の結果から、10週間で10万語を読むことを目標とした多読活動は目標に近い平均読語数の結果が出ており、学生たちも、現在の多読のやり方におおむね満足していることが分かった。今後は、学生たちの読語数を増やし、より多くの学生の読語数が10万語を超えるようにするための新たな活動をデザインし、積極的に授業に取り入れていきたいと思う。2015年度から始めた「お気に入りの図書発表会」が多くの学生の多

読のモチベーションを向上させたことが分かったため、今後は「お気に入りの図書発表会」のような本を通じて学生同士が交流できるような新たな活動を実践したいと考えている。また、質問紙調査にあった改善点や要望を参考に、貸し出し冊数や読書時間の見直し、多読図書の一部追加、おすすめ図書リストの作成なども行いたいと思う。

【参考文献】

- 深田桃代 (2009) 「自律的英文多読の継続を支える要因ー 100 万語達成者へのアンケート分析をもとに一」 『中部地区英語教育学会紀要』 紀要 38 号 205-212 頁
- 古川昭夫・神田みなみ (2010) 『目指せ 1000 万語英語多読完全ブックガイド』 東京：コスモピア
- 長谷川修治・中條清美・西垣智佳子 (2008) 「中・高英語検定教科書語彙の実用性の検証」 『日本大学生産工学部研究報告』 41 号 49-56 頁
- 門田修平・野呂忠司 (2004) 『英語リーディングの認知メカニズム』 東京：くろしお出版
- 門田修平・野呂忠司・氏木道人 (2010) 『英語リーディング指導ハンドブック』 東京：大修館書店
- Krashen, S.D. (1985). *The input hypothesis: Issues and implications*. Torrance, New York: Longman.
- 酒井邦秀・太田洋・柴田武史 (2004) 「“めざせ 100 万語” とは!？」 『英語教育』 12 月号 8-16 頁 東京：大修館書店
- 鈴木寿一(1996) 「読書の楽しさを経験させるためのリーディング指導」 渡辺時夫(編)『新しい読みの指導ー目的をもったリーディング指導』 東京：三省堂
- 高瀬敦子 (2010) 『英語多読・多聴指導マニュアル』 東京：大修館書店
- 山下淳子 (2004) 「英語と日本語の読解における読書習慣と情意傾向：多読指導に向けての基礎的研究」 『日本学術振興会科学研究費報告書(基盤研究 C/2)』

【謝辞】

本実践において、多読図書管理のご協力及び保管場所を提供して下さった岐阜大学全学共通教育事務室の皆様にご心より感謝申し上げます。